

下野市立南河内第二中学校

1 学校課題

「主体的なコミュニケーション活動を通して、深い学びを実現する生徒の育成」

2 研究計画

(1) 主題設定の理由

南河内第二中学校区では、小学校と中学校が同じ研究テーマを掲げ、系統的に小中一貫教育の推進に取り組んでいる。令和4・5年度の2か年計画で、「伝える力の育成」をテーマとして、「教育活動全体を通して、考えや気持ちを理解し、互いに認め合える子どもの育成」を目指している。本校では全教科を対象として「伝える力の育成」に取り組むことにした。そこで、学校課題を「主体的なコミュニケーション活動を通して、深い学びを実現する生徒の育成」とし、全教科でコミュニケーション活動を積極的に実施し、思考力・表現力を高め、学びを実現する生徒を育てていきたい。

(2) 学校課題の研究によって目指す生徒像

「自らの目標に向かい自己調整を行いながら、粘り強く学びを追究する生徒」

(3) 研究内容

令和4年度に出てきた課題を令和5年度で研究していく。

<課題>

- ・「主体的なコミュニケーション活動」の捉え方において、教科及び教師間で十分な共通理解が図れていなかった。「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力」を高めるために「粘り強く取り組む」「自己調整を行う」ことが必要だということを踏まえて授業づくりに取り組む必要がある。
- ・タブレットの活用は生徒たちの意欲を高めるが、多用することで本来の目的から外れてしまう場面もあった。コミュニケーション活動でのタブレットの活用は、あくまで手段であることを踏まえ改善を図る必要がある。

以上の点を踏まえ、学校課題をさらに実現するための具体的な研究内容を、以下の4つとした。

- ①「粘り強く取り組む」「自己調整を行う」姿が見取れる主体的なコミュニケーション活動の設定
- ②思考力、判断力、表現力等を高める主体的なコミュニケーション活動の工夫
- ③主体的なコミュニケーション活動に積極的に参加する雰囲気づくりと個への対応
- ④主体的なコミュニケーション活動を充実させるための、目的を明確にしたタブレット活用の工夫

(4) 研究手順

以下の手順で進めていく。研究授業（S&U コラボ 事業）は今年度2回、技能教科（美術）での要請訪問を1回設定し、教科の枠を取り除いて全教職員が参観する。研究授業の成果と課題のもと、各教科の研究実践や授業改善に生かしていく。

- | | |
|---------|--|
| ① 4月 | 各教科部会で研究計画の作成・研究のポイント確認
評価計画・指導計画・課題設定についての検討 |
| ② 4月18日 | 全国学力・学習状況調査実施（3年）とちぎっ子学習状況調査実施（2年）
教研式標準学力検査実施（1年） |
| ③ 8月 | とちぎっ子学習状況調査及び教研式標準学力検査の分析
各教科で評価計画及び指導計画について検討 |
| ④ 10月 | 全国学力・学習状況調査の分析
各教科部会で評価計画及び指導計画の修正及び自校化について検討 |
| ⑤ | 『深い学び』に関する研究授業・授業研究会の実施
S&U コラボ 事業（数学・10月）（国語・11月）要請訪問（美術・9月） |
| ⑥ 12月 | 教科部会で研究報告の作成 |

3 研究内容

- (1) 「粘り強く取り組む」「自己調整を行う」姿が見取れる主体的なコミュニケーション活動をどの場面で設定したか。
 - ・ルブリックを活用し、生徒が目指すべき姿を明確にすることで修正する点を自覚でき、各自が自己調整を行う姿が見られた。(理科・英語)
 - ・身近なロゴマークの鑑賞活動を通して分かりやすいデザインの要素を分析し、それらを話し合う活動から、自分自身の作品に取り入れようとする姿が見られた。(美術)
 - ・陸上競技の授業で、少人数のグループを設定し、各自のフォームの改善に取り組ませた。(保体)
 - ・目的に合ったプログラム作成の課題を提示し、個人やチームで解決する中で粘り強く取り組む姿が見られた。(技術・家庭)
- (2) 思考力、判断力、表現力等を高めるための主体的なコミュニケーション活動をどのように工夫したか。
 - ・「批判的な読み」から多角的に考える活動を行った。根拠を確認する話し合いをグループで行い、コミュニケーションも活発であった。(国語)
 - ・自らの体験や考えを表現するために、相手により良く伝えるプレゼン資料を作成することで、判断力や表現力が高まった。(英語)
 - ・歌唱や器楽では、改善点や工夫点について意見を出し合い、より良いものにしようとコミュニケーション活動することができた。(音楽)
 - ・アイデアスケッチを構想する段階で、友人にコンセプトを説明する場面を設け、自身の考えを相手に伝えるように授業の展開を工夫した。(美術)
- (3) 主体的なコミュニケーション活動に積極的に参加する雰囲気づくりと個への対応をどのように行ったか。
 - ・自分の考えを言語化させてから話し合い、一人一回は発言するようにする。また、自分の考えとの類似点や相違点を意識して意見を聞くようにする。(国語)
 - ・個人で考えた内容をグループで共有してから発表することで、苦手な生徒でも自分の意見をもった上で発表できた。(社会)
 - ・活動に関連する話題からペアでモールドを行い、これからの活動に見通しを持たせる。ペアから3、4人のグループにして2人以上の意見を聞くことで、新たな気付きになり学びが深まった。(英語)
 - ・協働課題では、意見を出しやすい2～4人のグループをつくり、リーダーを中心に役割分担をしながらその一員として活躍する場面を設定した。(技術・家庭)
- (4) 主体的なコミュニケーション活動を充実させるため、目的を明確にしたタブレット活用になっているか。
 - ・調べ学習でのアンケート調査などに forms を活用することで、実施から結果報告まで短時間で行うことができた。(社会)
 - ・jamboard を利用することで1つのボードに全員で書き込み、意見をまとめたり、他のグループの考えをすぐに確認したりと、意見交流の活性化につながった。(数学)
 - ・実験の予想と結果を共有する場面で、タブレットのネットワーク機能を活用した。ホワイトボードより効率よく意見を集約することができた。(理科)
 - ・リーダー演奏の動画を撮影し、その動画を見ながらお互いにアドバイスすることで表現力を高めることができた。(音楽)

4 本年度の成果と課題

- (1) 研究の成果
 - ・自らの目標に向かい自己調整を行いながら、粘り強く学びを追究する生徒を目指して授業づくりに取り組み、どの教科においても一定の成果を上げることができた。
 - ・場面や形態に合わせた ICT 機器の活用により、主体的なコミュニケーション活動が実施でき、粘り強く学びを追究する生徒の育成につながった。
- (2) 研究の課題
 - ・今後も主体的なコミュニケーション活動を通して深い学びを実現する生徒を育成するために、生徒の学ぶ意欲を引き出す目的・場面・状況の設定を工夫し、伝える必要性も明確にしながら取り組んでいく必要がある。
 - ・効果的なタブレットの活用研修でスキルアップを図り、誰でも同じように使えるようにする必要がある。